

# きちやの夏なつ



登場人物

ナレーター

吉弥きちや

吉弥の母きちやの はは

盛雄もりお

三郎さんろう

恭平きんぺい



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



ナレーター

鈴鹿明神社の夏祭りは、五日も続きました。七月三十一日が宵宮、八月一日が本祭りです。まだ、このお祭りが続きます。農家では田植えと草取りを終えて、ひと息つく頃で、稲の豊作を祈願するお祭りでもありました。また、子供たちにとってもこのお祭りは、夏休みの中の最も楽しい行事でした。

このお祭りには、神輿が三基も出ました。一基の神輿を十八人の徴兵検査に合格した若者が担いで相模川まで繰り出し、そこでみそぎの儀式を行いました。また、山車も出て、その一隊が氏子の地域をねり歩きました。さらに神社の境内には、あちこちに屋台が出て、大勢の人たちが集まってきました。

ナレーター

小学三年生の吉弥は、このお祭りがあまり好きではありませんでした。吉弥はお母さんと二人暮らしで、お母さんが裁縫の仕事で生計をたてていました。ほとんどの友だちが、仕立て下ろしの着物や学校の制服を着て、お父さんやお母さん、お兄さんやお姉さんと連れ立ってお祭りに出かけました。吉弥の家は座間の入谷、田んぼに囲



吉弥

ナレーター

「ご免めんください。」  
吉弥が声をかけると、盛雄もお手伝いてつだいさんのうしろから出てきました。

盛雄

吉弥

盛雄

吉弥

ナレーター

盛雄

「吉弥、明日あしたはお祭りに行くんだろ？」  
「うん、行くよ。」  
「誰と行くの？」  
「お母さんと……。」  
吉弥は浮かぬ顔で答えました  
「そうか。三郎さぶろうはお母さんと、恭平はお兄さんと行くんだって、一緒に遊ぼうよ。」



ナレーター

吉弥

盛雄は言いました。その帰りに吉弥は澤田家の門の前に落ちていた一銭銅貨どうかを素早く拾ってひよいとポケットにいれました。家へ帰る途中、吉弥は何となく憂鬱ゆううつでした。

「お母さんはたくさん仕事しごとがあるからお祭りには行ってくれそうにないし、行かないと、また皆に言われちゃう…；どうしようかなア。」

ナレーター

お母さん

翌日よくじつも、朝早くからお母さんは、黙々と着物きものを縫ぬっていました。家の中はシンと静しずまりかえています。いつもの風景です。

「吉弥、午後ごごからお祭りに行っておいで、お母さんは、仕事がたまっているから行けないけど。」

ナレーター

突然、おさんは縫ぬい物をしながら言いました。反物たんものが部屋すみの隅すみに積つみ上げられていました。

吉弥

「ひとりで行くのなんか嫌いやだよ。みんな、お母さんやお父さん、お兄ちゃんやお姉ちゃんで行くんだよ。」

お母さん

「そうよねえ、でもお母さんは忙いそしくて行けないの。ごめんなさいね。貴方はもう三年生だから、それくらいは分かるでしょう。」



ナレーター

お母さんはきりつとした顔で言ったのです。吉弥は仕方なくひとりで出かけることにしました。吉弥はポケットの中の一銭銅貨を握りしめていました。朝から焼けつくような暑い日でした。

三郎

「おう、吉弥、ひとりか？お母さんは？」

ナレーター

先に来ていた三郎が声をかけました。

楽しさが足元から湧き上がってくるような雰囲気でした。

吉弥

「来てるよ。向うで立ち話してる。」

ナレーター

しばらくして恭平がお兄さんとやってきました。

恭平

「三郎と吉弥、もう来てたのか。盛雄もやって来たな。おう盛雄、何だか嬉しそうだな、何か良いことがあったのか。」

盛雄

「うん、昨日、お母さんに貰ったお小遣いの一銭銅貨を落としてしまったんだ。ガツカリしていたら、春おばさんから、またお小遣い貰ったんだ。」

ナレーター

と盛雄が言いました。

まわりを見まわしていた三郎が、



恭  
平

夏祭りが終わおってから、盛雄が遊びに来ました。  
「吉弥、夕方ゆうがたから鈴鹿名神社のそばの龍源院りゅうげんいんにホタルを捕とりに行くこ



三  
郎 恭  
平

「オレ、かき氷かきこりを食べてきたよ。美味おいししかったな。」  
「オレは、綿アメわたを買かってきた。」  
「うまそうだなア。」  
と盛雄もりおが覗のぞき込みました。



三  
郎 恭  
平  
ナレーター  
盛  
雄

「吉弥、お前のお母さん来てないじゃないか。ウソをついたな。」  
「吉弥はウソツキだよ。そんなヤツと遊びたくないな。」  
それを聞いた盛雄もりおが優やさしい顔つきで言いました。  
「そんなこと言うなよ。吉弥、ウソツキじゃないよね。それより何か買かいに行こうよ、向むかうの屋台やたいでさ。」  
そういって盛雄は三郎と恭平と一緒に屋台の方へ歩いて行きました。  
吉弥はポケットの一銭銅貨いちせんどうがをもてあそびながら、ひとりポツンと彼らかれらが戻かえって来るのを待まちっていました。境内境内では祭りばやし祭りばやしが華やかはなやかに鳴り響ひびいて、お祭りの雰ふん囲い気きを盛り上あげていました。



吉弥  
うよ。お父さんが連れて行ってってくれるんだ。」  
「お母さんに聞いてくる。」

ナレーター  
吉弥はお母さんのところへとんで行きました。

お母さん  
「折角せっかくだから、連れて行ってもらいなさい。」

ナレーター  
玄関前げんかんまえで、お母さんは「よろしくね」と盛雄に頭を下げました。

ナレーター  
龍源院りゅうげんいんの裏うらの崖下がけしたにはあちこちに湧わき水があり、昔から飲のみ水や

水車すゐぐるまに使つかわれていました。ここにはゲンジボタルがいて、夏なつになる

とそれが飛とび交かって、楽しませてくれました。水辺みずべに立たっていると

ホタルがふわりふわりと飛とんで来きます。それをウチワで払はい落おとし

て捕とらえます。逃げたホタルは、また空くう中ちゆう高まく舞まい上がります。

「ホーホー、ホタル来きい。あっちの水はニーガイぞ。こっちの水は

はアーマイぞ」

という声こゑがあちこちから上がります。

盛雄  
「吉弥、捕とろうぜ。」

ナレーター  
盛雄がはずんだ声をかけました。田圃たんぼの上をそよぐ風かぜは心地こころよいも



のです。捕とらえたホタルはお尻しりから淡あわい光を放はなっています。吉弥は  
ポケットに手を入れ、

盛雄

「明日、このお金、盛雄に返そう。」

ナレーター

と思ったのです。